

学位論文審査報告

中村 平八『発展途上社会主義の研究』

学位の種類 経済学博士

授与年月日 1991年3月23日

〔論文内容の要旨〕

これまでの現存社会主義論が、一国史の見地に傾斜したものが多く、世界史の見地からの照射が欠落しており、そのためにいずれも現存社会主義の特殊性の本質把握に失敗している、というところから、現存社会主義に理論接近するさいの世界史のおよび世界的な見地をつらぬこうとされるのが、なによりの特徴をなしている。

本論文は、第1部および第2部とからなり、第1部には、現存社会主義を世界史の展開のなかであとづけた第1章と第2章、マルクス=エンゲルス、レーニンなどの古典に依拠した現存社会主義論および現代ソ連における現存社会主義論をあつかった第3章と第4章が置かれ、第2部には、今日の中国および日本における現存社会主義論を批判的に検討した第5章と第6章と第7章、そして補論的に、ソ連のゴルバチョフ政権のペレストロイカをあつかった第8章、ソ連の社会科学史を検討した第9章が置かれている。

本論文であつかわれている主要な内容は、次のようないくつかの柱にまとめることができよう。

(1) 現存社会主義に理論接近するさいの世界史のおよび世界的見地。資本主義社会は、イギリスで確立し、隣接するヨーロッパに伝播し、西欧資本主義として成立する。しかし、その生成期—確立・完成期—崩壊期のすべてをつうじて、世界の非西欧地域を、その原料・農産物供給経済体制として組織し、世界資本主義の再生産構造の有機的一環として組み込み、自己の存立条件としてきた。西欧資本主義は支配的資本主義として非西欧地域を従属させ、そこに従属的資本主義が作りだされる。従属的資本主義には、本来の植民地（従属的資

本主義から支配的資本主義へ発展していく北アメリカ型、従属的資本主義から途上国型資本主義へ発展していく南アメリカ型、従属的資本主義から途上国型社会主義へ発展していくキューバ型）と非本来の植民地（従属的資本主義から途上国型資本主義へ発展していくアジア・アフリカ型、従属的資本主義から途上国型社会主義へ発展していく中国型）がふくまれる。19世紀までは支配的資本主義が世界資本主義の運動を明示的に規定していたが、20世紀になると決定的な変化が生じ、逆に従属的資本主義の明示的な運動によって世界資本主義が死滅の過程に入るようになった。

(2) 「従属的資本主義」から生まれてくる「発展途上社会主義」という特殊な概念。現存社会主義は、世界体制としての資本主義のもとで、従属的發展をよぎなくされた民族が社会革命の勝利後に国家権力をてこに、目的意識的に社会主義の諸前提を創出する特殊な社会主義＝発展途上社会主義として規定される。マルクスのいう社会主義（共産主義の低い段階）への過渡段階としての発展途上社会主義は、その政治的本質からすれば国家社会主義であり、その経済的本質からすれば社会主義の物質的諸前提の創出を課題とする転倒した過程をもつ特殊な社会主義である。

(3) 「発展途上社会主義」にのみ固有な「特殊な過渡期」の概念。発展途上社会主義は、質的に区別される二つの発展段階をもち、第一段階＝多ウクライド社会主義（社会主義、資本主義、小商品生産など）から第二段階＝二所有制社会主義（国家的所有および協同組合的所有）を経ることによってはじめて、単一の全人民的所有にもとづくマルクスのいう社会主義（共産主義の低い段階）へ移行することができる。このような「特殊な過渡期」は、従属的資本主義から発展途上社会主義へのばあいにものみ固有なものである。

(4) その視角から照射したマルクス＝エンゲルスの共産主義社会論、とくに世界共産主義革命論。マルクスやエンゲルスの科学的社会主義の理論は、支配的資本主義の生産関係と運動法則の研究にもとづくその理論的現実的揚棄の理論が主であったが、彼らにはもう一つの系列に属する従属的資本主義についての研究—「アイルランド問題」「ポーランド問題」というヨーロッパ内植民地

の民族解放問題、イギリスの心臓部革命とフランスなど大陸の末端部革命との相互関係の問題、「インド論」「中国論」および晩年の「ロシア問題」、あるいはアジア・アフリカ・ラテンアメリカの植民地従属国の民族解放問題をあつかった論文がある。彼らは、世界共産主義革命の観点からこの両者の相互関係に関心をよせて、世界革命の端緒は先進国革命によって切り開かれる可能性がより大であるとはいえ、後進国革命が先行しそれが先進国革命を誘発して世界的規模での社会主義への移行を実現する可能性もまた存在することを明らかにしようとしていた。そして、これらの従属的資本主義が社会主義へ移行するさいには、特殊な政治的また社会的段階を経るであろうことを示唆していた。

(5) その視角から照射したレーニンの共産主義社会論、とくに「特殊な過渡期」論。20世紀の根底的に変化した世界資本主義のもとで、レーニンはロシアの後進国型革命における「特殊な過渡期」の理論構築にとりかかった。レーニンは、マルクス的な「一般的な過渡期」と「特殊な過渡期」を明確に区別していなかったが、このような「特殊な過渡期」の存在が必然的であること、その長期性と段階性、その最初の小段階が多ウクライド制であること、などを明らかにしようとした。

(6) 以上のような、世界史のおよび世界的な見地と発展途上社会主義の概念にてらしての、現代ソ連の共産主義社会論の評価、中国の社会主義社会論の評価、日本での現存社会主義の世界史的位置づけをめぐる論争の評価。ここでは、一方からは、世界社会主義論との相互関係の視点の欠落、他方からは、「一般的な過渡期」論と区別される「特殊な過渡期」論の視点の欠落、を鋭く批判し、したがって多ウクライド制の終了をもって過渡期の終了＝マルクスのいう社会主義（共産主義の第一段階）の確立とする通説の多くとは異なるものとなっている。

〔審査報告要旨〕

本論文において、なによりも積極的に評価しうるのは、次のような諸点である。

(1) 現存社会主義の多くは、資本主義が先進的に発展していたところから社会主義に転化したのではなかった。その特殊性を、「一国史の見地」からだけでなく「世界史のおよび世界的見地」からみなおし、「支配的先進的資本主義」と「従属的後進的資本主義」とからなる世界資本主義の総体の相互関係のなかで規定していこうとする。そのような問題意識と問題視角がもつ創造的な積極性をなによりも評価することができるであろう。本論文は、現存社会主義を世界史的視点から大きく位置づけなおしていこうとする新しい動向を先取りするような研究の一つであった。

それは、また、近年における「周辺資本主義」論や「世界システム」論、あるいは「マルクス=エンゲルスの世界史像・後進国像」研究の方法を、現存社会主義論の研究に適用していこうとする先駆的な試みでもあった。

(2) その視角から、マルクス=エンゲルスの共産主義社会論をその「個々の著作、特定の著作の片言隻語に頼るのではなく、彼らの生涯の全理論活動に依拠」して、系統的にみなおそうとした点である。そのなかで、「アイルランド問題」「ポーランド問題」「インド論」「中国論」「ロシア問題」の研究の系列、「心臓部」資本主義（イギリス）にたいする「末端部」資本主義（フランスなどの大陸）の世界的連関についての研究の系列、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの植民地従属国についての研究の系列を丹念にほりおこそうとし、世界の規模での社会主義への移行における「支配的先進的資本主義」と「従属的後進的資本主義」との相互関係、そして後者の移行論=過渡論の特殊性を検出しようとした。

(3) 同様に、ロシアにおける社会主義への移行の特殊性を、レーニンの著作を系統的にたどってあきらかにしようとした点である。中村氏をもふくむ研究グループによって、かねてよりレーニンにおける「特殊な過渡期」論として積極的に主張されてきたものである。

そして、その特殊性を、なによりも、社会革命によって掌握された国家権力をテコにして、逆に社会主義の諸前提そのものを創出していかなければならなかった「顛倒性」にもとめ、「国家資本主義」としている点である。このよう

な特徴づけは、近年の現存社会主義の激変のなかで、ますます共通の認識となってきたものであるといえよう。

(4) その後のソ連における社会主義社会論＝過渡期論（スターリン・モデル—フルシチョフ・モデル—ブレジネフ・モデル—「発達した社会主義社会」論争）、中国における社会主義社会論＝過渡期論（「新民主主義社会建設」論—「過渡期の総路線」論—「文化大革命期の社会主義社会論」—「79～80年の社会主義社会論争」）を系統的に整理しようとした点であり、中村氏によって別に翻訳されている紹介資料とあわせて、おそらく日本の学界においてもっとも丹念な業績のひとつといえよう。また、社会主義「生成期」論など日本における論争についても、独自の視角からする詳細な整理がおこなわれている。

これらのなかでは、レーニンによる過渡期の特殊性の解明の構想がその後正しく継承発展させられず未完に終わったこと、とくに多ウクライド制の終了と過渡期の終了と社会主義（共産主義の第一段階）を等置する定型がスターリンによってあたえられたこと、その後のソ連において彼岸の社会主義＝「目標としての社会主義」がそれにいたる「過程としての社会主義」と区別されず、生産力の高低にかかわらず人間の発展が追求されなければならなかったのにそれが欠落していたこと、などの貴重な指摘がなされている。また、中国の社会主義建設における紆余曲折のあとが、過渡期論と関連づけられて手際よく系統的に総括されている。

なお、たんに理論的次元の検討だけにとどまらず、とくにソ連にかんして、中村氏の長年にわたる実証的歴史的研究のうらづけがあることも評価されなければならないであろう（本論文には、第8章「ゴルバチョフ改革下のソ連社会主義」がおさめられているだけであるが、参考の研究業績としてあげられているもののなかにも、「過渡期の社会階級」という優れた業績、資料紹介「戦時共産主義・ネップ・社会主義への過渡期」「革命70周年のソ連経済」「ソ連歴史学界におけるロシア帝国主義論争」などがある）。さらに、それらの社会主義社会論の展開の基礎にある方法論の特徴についても、本論文では第9章で「ソヴェト社会科学史研究」というきわめてユニークな業績が付されている。

本論文は、みずから試論的で論争的な性格をもつとされているところからもわかるように、次のようないっそうの解明を要する問題が残されているように思われる。

(1) 「世界史的見地」を強調しながら、それと「一国史的見地」との相互関係をいかに整合的に展開していくか、ということにおいて残されている課題である。それは、「世界資本主義」の支配と従属の相互関係の総体、そのなかでの「従属的資本主義」のそれぞれの国の社会経済的構造の特殊性をいかに内在的に展開していくか、という課題でもある。それは、中村氏による「支配的先進的資本主義」「心臓部資本主義」あるいは「従属的資本主義」「末端部資本主義」なる概念がより普遍的に受けいれられていくかどうか、という問題ともつながるものであろう。

この点にかんして、マルクス=エンゲルスの「第2の研究の系列」における「アイルランド問題」「ポーランド問題」「インド論」「中国論」「ロシア問題」、アジア、アメリカ、ラテンアメリカなどの植民地従属国、ヨーロッパ社会のフランスなど大陸の「末端部」、あるいはレーニンにおける「中くらしい弱い」ロシアのそれぞれの違いがかならずしも十分に区別されないまま、それらが「従属の後進的資本主義」として一括されていくことがもつ問題ともかかっている。中村氏自身によって未解決の問題として残されている、「従属の後進的資本主義」から生まれる「発展途上社会主義」の型（ソ連型、ユーゴ型、ハンガリー型、あるいは中国型など）の違いの問題ともつながるものであろう。

また、「世界史的見地」にたつて、世界資本主義体制の19世紀段階と20世紀段階との決定的相違が強調され、「支配的先進的資本主義」が「従属の後進的資本主義」の社会革命を絞殺しえなくなったという特徴があげられる。そのさいの、帝国主義段階における例えば資本の輸出とそれぞれの従属的諸国の再生産構造との相互関係を、より内在的に展開していくという課題ともつながるものであろう。

さらに、それはレーニンによる帝国主義世界体制の政治的・金融的支配従属関係による4つの群の分類との関連、「周辺資本主義」論や「世界システム」

論で提起されている支配・従属をめぐる論議との関連など、総じて「従属的資本主義」の概念をいっそう理論的に精緻化し且つ実証的にうらづけていく課題でもある。

(2) 「発展途上社会主義」の概念における社会主義の特殊性と一般性をめぐる問題である。「発展途上社会主義」について、一方では、「不完全な、不十分な、未成熟な、特殊な」社会主義であることを忘れないかぎりやはり社会主義であるとされながら、他方では、資本主義とも社会主義とも区別される「独自の社会構成」ではないかという仮説も残し、マルクス学派のいう社会主義の概念との学問上の差異は明白であって、その前段階に位置するものとされている。また、それは、20世紀の新生事物であり、既存の範疇では不十分にしか把握できないとされる。そして、全体としては、社会主義との一般性、共通性よりも、むしろ特殊性が強調されていくことがもつ問題である。この「独自の社会構成」の仮説は、「発展途上社会主義」がマルクスらのいう「社会主義（共産主義の第一段階）」へ、いつどのような形態で移行するのか、その合法則性は論証可能なのか、という問題とともに、中村氏自身によって未解決のものとして残されている。

(3) 「発展途上社会主義」にのみ固有なものとされる「特殊な過渡期」の概念にかんする問題である。「従属的後進的資本主義」から「発展途上社会主義」へのばあいにおいては、マルクスらのいう「社会主義（共産主義の第一段階）」そのものへ移行するための「特殊な過渡期」が必要であって、「支配的先進的資本主義」のばあいには「一挙に、直接に」その「社会主義（共産主義の第一段階）」に移行しうる、とされる。

たしかに、「従属的後進的資本主義」からの移行に特殊性があり、その解明が重要であるとしても、そのうらがえしとして「支配的先進的資本主義」のばあいには「一挙に、直接に」移行がおこなわれるとして、それへのいかなる過渡期も不必要である、といいきれるものであろうか。近年のいわゆる先進国革命をめぐる民主主義的変革の課題（例えば、そのなかでの多様な所有・経営形態の存在）の内容と照らしあわせてみても、抽象化しすぎの感をまぬがれない

ように思われる。

このことは、マルクス=エンゲルスの過渡期論の論理的次元の理解のしかたにもかかわってくるように考えられる。中村氏は、マルクス=エンゲルスにおいても「特殊な過渡期」の理論化の萌芽があったとされるが、同じ研究グループの他の研究者は、それに対しては否定的である。そこでの問題ともかかわって、『ゴータ綱領批判』などの過渡期論の論理次元は「純粹資本主義からの一般的原理的抽象的レベル」のものであって、それとそれが「世界史のおよび世界的」な相互関係の総体のなかで具体化されていくレベルとは区別されるべきであり、植民地従属国、ヨーロッパ内植民地、ヨーロッパ社会の「末端部」、さらにはその「先端部」についても、「社会主義（共産主義の第一段階）」への移行の特殊性が展開されていかなければならないのではなかろうか。もちろん、先進国における特殊性は「従属的後進的資本主義」のばあいとは質的に異なり、それが『ゴータ綱領批判』の論理次元のものより近いものとなるであろうと思われるが、しかしいかなるそれへの過渡期も存在しないということにはならないであろう。先進国における「特殊な過渡期」の問題は、中村氏自身によっても残された未解決の問題とされているものである。

マルクスのいう経済的社会構成のあいつぐ歴史としての世界史の見地と中村氏の「世界史の見地」との関連など、総じて「論理的なもの」と「歴史的なもの」との相互関係のいっそうの解明の課題である。

(4) 「発展途上社会主義」の発展段階の画期の内容にかかわる課題に関してであるが、生産手段にたいする所有制ということを主軸にして、「多ウクライド制」—「2所有制」—「1所有制」の標識にもとめられていくことの問題についてである。近年の現存社会主義の再編をめぐる実践と理論の動向のなかで、所有の形態、多ウクライド制や2所有制といった所有制の外的な違いだけでなく、むしろそれぞれの内容の実質的な機能化、所有が労働や経営・管理との相互関係で実現されていくさいの自主性や効率性、所得としての実現、それとかかわっての商品生産・市場メカニズムの機能が問題とされなければならなくなっている。中村氏は、うえのような所有制だけの展開、しかも「社会主義（共

産主義の第一段階)」の標識として商品生産の廃絶をあげられるが、そのままではいささか単線的に過ぎ、生産関係の構造と機能の総体にそくしたいっその豊富化が必要とされてくるのではなからうか。

しかしながら、このような残された課題は、すでに中村氏自身によって本論文その他で自覚的に設定されているもので、しかもその多くはむしろ社会主義経済学界全体にとっての新たな探求の課題であるともいえるものであって、この審査報告要旨の前半のところ述べてきた積極的評価一問題意識と問題視角の創造的な積極性、それにもとづく古典の社会主義論の系統的な再評価、ソ連や中国での過渡期論の整理と批判的検討の学問的な内容がもつ評価をいささかも低めるものではない。すでに、そのことは、一連の書評や研究会をつうじて学界の中でも認められているところである。

以上のような審査内容にもとづいて、本論文は、本学学位規定第5条第2号による博士の学位を授与するに値するものである、と認める。

審査委員会

立命館大学経済学部教授(主査)	芦田 文夫
立命館大学経済学部教授	小檜山政克
立命館大学経済学部教授	岩田 勝雄